

謡曲〈知章〉における「卒都婆」と「波」と

——久次本を中心に——

岩城 賢太郎

一 謡曲〈知章〉の作中場面

謡曲〈知章〉は、覚一本『平家物語』で言えば巻九「知章最期」を本説とし、一の谷合戦で父平知盛をかばって討ち死した知章をシテとする。

この〈知章〉の作中場面は、現行観世流(観世流大成版)では、西国より須磨に上ってきた僧よって、以下のように示される。

ワキさても我鄙の国より遙々と、これなる磯辺に来て見れば、新しき卒都婆を立て置きたり、亡き人の追善と思しくて、要文さまく書き記し、物故平の知章と書かれたり、知章とハ平家の御一門の御中にてハ、誰にてかましますらん、あら傷はしや候

ところで、〈知章〉には、「久次」署名の室町初期書写の能本が伝存するのであるが、この本では、以下のように語られる。

2段「口」ワキわれ鄙の国よりはるく上り、この浦に上がり、これなる磯辺を見れば、新しき卒都婆を立て置きたり。立ち寄り見れば、亡き人の第三年のしるしと見えて、要文さまく記し、年号日付の誂の下に、物故平の知章と書つれたり。げにくこの一の谷は、近頃平家の一門の果て給ひたる所なり。知章とは一門の内にては、誰にてかましますらん。あら痛はしや候。

注目されるのは、この須磨の浦に立てられている卒都婆が「第三年のしるし」、すなわち知章の三年忌供養のものとされることである。つまり、

現行観世流と比較すると、「久次」署名本では、2段に入って、ワキが作中場面にある卒都婆を説明することによって、作中時間が知章死後三年であると明示されることになる。然るに、右に見るとおり、現行観世流ではこの卒都婆を三年忌のものとする詞章がない。これは、実は〈知章〉一曲の作中時間の設定等に関わる、大きな詞章の相違なのである。本稿は、謡曲〈知章〉について、この「久次」署名本の詞章を室町末期から江戸中期までの諸謡本の詞章と対照し、特に作中場面の設定に注目して、作品の構想について考察するものである。

二 久次本における「卒都婆」

謡曲〈知章〉一曲の展開は、久次本では、以下のとおりである。

場		前		後	
1段	ワキ西国の沙門「ソウ」が、海路で須磨の浦に到着する	1段	ワキ西国の沙門「ソウ」が、海路で須磨の浦に到着する	11段	知章が、討ち死のさまを語り、回向を依頼して消える
2段	沙門が、知章供養の卒都婆を見つける	2段	沙門が、知章供養の卒都婆を見つける	10段	知章が、一の谷を逃れた知盛の嘆きを語る
3段	前シテ須磨の里人「ヲトコ」があらわれる	3段	前シテ須磨の里人「ヲトコ」があらわれる	9段	知章と沙門が応対し、回向を依頼する
4段	里人が、知盛の一の谷落ちの次第を語る	4段	里人が、知盛の一の谷落ちの次第を語る	8段	後シテ知章の幽霊「トモアキラ・トモ」があらわれる
5段	里人が、沙門に重ねての回向を依頼して波間に消える	5段	里人が、沙門に重ねての回向を依頼して波間に消える	7段	沙門は、知章を弔って説経する
6段	アイの語り(*久次本では「シカク」以外の記載無し)	6段	アイの語り(*久次本では「シカク」以外の記載無し)	6段	アイの語り(*久次本では「シカク」以外の記載無し)

このように、前後二場型の典型的な夢幻能の型式を有している。その久次本〈知章〉は、次のようにはじまる。

1段「次第」ワキ春を心のしるべにてくうからぬ旅に出でうよ

〔名ノリ〕ワキこれは西国方の沙門にて候。我いまだ花の都を見ず候ほどに、このたび便船をこひ、たゞ今海路におもむき候

〔上ダ哥〕ワキ旅衣八重の塩路をはるぐとなを末ありと行く波の雲をもわくる奥つ波、我もうき世の道出で、いづくともなき海際や浦なる関に着きにけりく

〔着ゼリフ〕ワキこのほど便船したる船人、いづくともなき浦に船をとめたり。これなん聞き及びたる須磨の浦とはこれかや。聞き及びたる名所にて候へば、立ちより見ばやと存候

〔知章〕のワキ西国の沙門は右のような「次第」「名ノリ」で登場し、須磨の浦に至る。そして、冒頭に掲げた2段の詞章のように、ワキは卒都婆を見出す。須磨の浦の水際に立てられた卒都婆は新しいもので、「亡き人の第三年のしるしと見えて、要文様々に記し、年号日付の誌の下に、物故平の知章と書ゝれたり」というように、作中場所に存在するものとして、ワキ沙門によって具体的に語られる。そして、この卒都婆についてのワキの語りによって、〔知章〕一曲の作中場面、つまり、須磨の浦という作中場所で、平知章の死後三年という作中時間が規定されることになる。この卒都婆について、〔知章〕謡本諸本間に様々な相違が見られる。

〔喜勝〕これなる磯辺に、なき人の第三年の追善とおぼしくて、年号日づけの其下に、もつ平の知章とかゝれたり。ともあきらとハ一もんの内にて、誰にてかましますらん。あらいたハしや候。

〔淵田〕我ひなの國よりはるぐ上り、磯邊を見れば、人の第三年のしるしと見えて、ようもん様ぐしるし、物故平の知章とかゝれたり。ともあきらとハ一門のうちにてハ、誰にてかまします覧。あらいたハしや候。〔妙庵ほぼ同文〕

〔下間〕又是成磯邊をミれば、なき人の第三年の追善とおぼしくて、

要文さまぐしるし、平の知章とかゝれたり。知章とハ一門の内にて、誰にてかましますらん。あらいたハしや候。

〔毛利・了随・上杉・六徳・下刊ほぼ同文〕〔天和〕扱も我鄙の國よりはるぐと、是成磯邊に来てみれば、新しき卒都婆を立をきたり。なき人の第三年の追善と思しくて、要文様々書しるし、物故平の知章と書れたり。知章とハ平家の御一門の御中にてハ、誰にてかましますらん。あら痛はしや候。

〔元祿ほぼ同文〕

〔福王〕扱も我ひなの國よりはるぐと、是なる磯邊に来てみれば、新しき卒都婆を立をきたり。なき人の追善と思しくて、要文様々書しるし、物故平の知章と書れたり。知章とハ平家の御一門の御中にてハ、誰にてかましますらん。あら痛はしや候。

〔明暦・寛政ほぼ同文〕

久次本と同様に「年号日付の誌」が卒都婆に書かれていたとするのは喜勝本のみであり、卒都婆の描写は久次本が最も詳しい。

ただ、注目されるのは、福王本・明暦本・寛政本の「なき人の追善とおぼしくて」という詞章である。これら近世の諸本では、前掲現行観世流〔知章〕の詞章と同じく、卒都婆は追善のものと語られるものの、三年忌供養のものとは語られないのである。この件は続く3段にも引き継がれる。

3段〔問答〕シテいかにお僧は何事を御不審候ぞ

ワキこれは西国方の沙門にて候が、この磯に上がりこれなる卒都婆を見れば、物故平の知章と書ゝれて候ほどに、さては平家の一門にてぞ御座候らんと痛はしさに一遍の念仏と回向申候シテげに遠国の御ことならば知るし召されぬは御ことわり。

武蔵の守知章と申し、は、相国の三男新中納言知盛の子に知章は、

この一の谷にて討たれぬ。その合戦な二月七日、今日はまた如月七日なれば、第三年の追善に縁の人の今朝の間に立て置きたるしなり。一樹の陰に宿り一河の流れを汲む事も、みなこれ他生の縁ぞかし。遠国の人にてましませども、たゞ今こゝに來たり給て、しかも忌日にあひ当たりて、一遍の念仏をも回向し給事のありがたきよ。よくく御弔ひ候へ

前シテ須磨の里人が登場し、卒都婆をめぐつてワキ沙門と問答し、亡き知章の供養を勧めるのであるが、この前シテ里人の卒都婆について語る詞章には、諸本に以下のような違いが見られる。

〔喜勝〕武蔵の守ともあきらハ、此一の谷にてうたれぬ。その合戦ハミとせと申し二月七日、けふハ又きさらぎ七日なれば、ゆかりの人のけさのあひだにたてをきたるしなり。

〔下間・毛利・了随・上杉・六徳・下利ほぼ同文〕  
〔淵田〕げにく遠国の御事なればしるしめさぬハ御理。武蔵守ともあきらと申しハ、相國の三男新中納言知盛の御子むさしのかみ知章と申人ハ、此一谷にてうたれ給。其合戦ハ三年と申し二月七日、けふハ又きさらぎ七日なれば、第三年の追善にゆかりの人のけさのまに立置たるしなり。〔妙庵ほぼ同文〕

〔明曆〕実々遠國の人にてましませハしるしめさぬハ御理。知章とは、相國の三男新中納言知盛の御子にて候。二月七日の合戦にこの一谷にてうたれさせ給ひて候。されバ其日のけふにあたりたれば、ゆかりの人の立置たり。〔天和・元禄ほぼ同文〕

〔福王〕実々遠國の人にてましませハしるしめさぬハ御理。知章とは、相國の三男新中納言知盛の御子にて候。二月七日の合戦にこの一ノ谷にてうたれさせ給ひて候。されバ其日もけふにあたりたれ

バ、ゆかりの人の立置きたるそばにて候。

〔寛政ほぼ同文〕

どの本も、久次本同様、作中時間における「今日」が、一の谷合戦と同じ二月七日に当たるとするのであるが、喜勝本が一の谷合戦から「ミとせと申し」というように、淵田本・妙庵本も、今度は前シテ里人の側からも、三年忌の追善のため立てられた卒都婆であると語るのである。一方、明曆本・天和本・元禄本・福王本・寛政本の前シテの語りには、一の谷合戦より三年に当たるといふ詞章は見られない。尤も、このうち天和本・元禄本は、先の2段で、今日が知章の三年忌に当たるとワキが語っていたので、作中時間は、久次本等と同様、知章の討ち死より三年と見て差し支えないが、明曆本・福王本・寛政本の三本は、2段同様3段においても、ワキからもシテからも、「今日」が知章三年忌であるとは語られないのである。

これは、一見、「第三年」といふ詞章の有無という、卒都婆をめぐる小さな差異のようだが、知章の三年忌に当たるといふ詞章の有無は、曲の展開される作中時間に決定的な相違をもたらす。

この詞章の相違について、久次本が記された応永三十四年(一四二七)を基準とし、室町初期の見所の眼をもつて、作中時間を、観客から見た舞台上の時間として考えてみる。歴史事実で言えば、知章が一の谷において討ち死したのは、寿永三年(一一八四)二月七日のことであるので、久次本以下の(知章)の舞台上の時間は、寿永三年二月七日より三年後の過去にまで、二百五十年近く遡って展開されるのであって、観客は平氏滅亡直後の源平合戦の時代を彷彿として舞台を観ることになる。室町初期の観客の目からすれば、舞台上で、いわば「過去劇」が展開されるのであって、ワキ西国の沙門もそうした平安時代末期の人物で、見所とは時間を異にする登場人物ということになる。

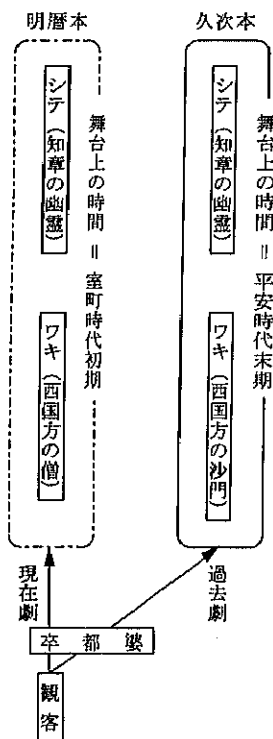
室町初期を時間軸として他の修羅能の作品を見てみると、例えば、ワキ

が藤原俊成の旧家臣である、定家在世の時代を作中時間とする（忠度）、熊谷次郎直実蓮生法師がワキで、蓮生法師在世の時代を作中時間とする（敦盛）、一場型ではあるが（清経）・（経政）・（生田敦盛）等も皆、室町初期の観客には「過去劇」として受け止められたはずである。

だが、室町初期に、明暦本以下の三本のごとき詞章で〈知章〉が演じられるとすると、作中時間は、単に知章の忌日に当たると規定されているだけで、作中時間と室町初期との具体的な時間の距離は測れない。観客は、舞台上の時間を源平合戦直後として鑑賞する必要はなく、いつの時代かは分からないが、知章が討ち死した同じ二月七日という点だけが認識される。ワキ「西国方より出たる僧」（明暦本）は、そういった舞台上の時間に登場する人物であって、詞章面からはいつの時代の人物であるかを規定する必要がない。室町初期の観客が、そのワキ僧を、自分たちと同じ室町初期の人物として捉えることも十分にあり得る。久次本のような〈知章〉を「過去劇」とすれば、明暦本のような〈知章〉は「現在劇」とも言えよう。観客からすれば、〈通盛〉・〈八島〉・〈笠卒都婆〉（〈重衡〉とも）・〈應〉等、多くの修羅能が「現在劇」として受け止められよう。これらの曲は、季節は規定されていても、舞台上の時間について具体的な年月にまで触れられることはない。

野上豊一郎氏が、能をシテ一人の独演が主である「主役一人主義」と規定し、ワキは「私たち見物人の代表者として出でる」、シテは過去の著名な人物や傳説の人物に扮したりするが、ワキはその同時代人ではなく、常にわれわれ見物人の同時代人である。（\*傍点原文のママと述べられて以来、一般に、観客はワキと時間を共有すると説明される。しかし、室町期の見所にとって、例えばワキ蓮生法師は過去の人物であり、従って、舞台上の時間は過去なのである。見所とワキとの時間の相違は明確に認識

すべきであろう。特に修羅能においては、この点を考慮すべきである。<sup>(6)</sup>世阿弥作（実盛）の成立には、『満濟准后日記』応永二十二年（一四一四）五月十一日の記事「真盛盡於加州篠原出現、逢遊行上人、受十念云々、去三月十一日事、卒塔婆銘令一見了、実事ナラバ希代事也」との関連が指摘されており、この事件の信憑性はともかく、〈実盛〉が、当時のこういった巷説をもとに成立した際物的な作品であることはよく知られている。久次本の筆写時である室町初期は、『平家物語』の生成期にも近く、琵琶法師による平曲も人々の耳に近い。そういった時代において、人々には、『満濟准后日記』の記事にも窺えるように、平氏一門やその縁の武将の怨霊の跳梁に対する危惧がある。室町人にとっては、源平合戦を扱った修羅能における時間は、単なる一文芸中における問題では済まされない側面を担うはずである。そういった事情を考えると、稿者が「現在劇」として掲げた修羅能は、室町期の観客にとっては、自分達の生活空間と重なり得る、現実味を帯びた事件性を含んでいると言える。



右に掲げたのは、室町時代初期の観客を想定し、卒都婆に書かれた日付によって作中時間の「今日」を平知章の死後三年の二月七日とする久次本と、単に二月七日とする明暦本とを対比し、〈知章〉における舞台上の時

間と観客の時間を整理したものである。

久次本（知章）を見る観客は、卒都婆をめぐる語りによって、源平合戦時直後の「過去」の物語り、即ち「過去劇」として（知章）を鑑賞する。

一方、明暦本（知章）を見る観客は、卒都婆をめぐる語りによつては、舞台上の「今日」を具体的に設定することは出来ない。しかし、先に述べたように、源平合戦に耳近い観客は、ワキ僧ばかりではなく、作中人物たるシテ知章の幽霊をも、自分達と同時代の室町初期に出現するものと捉え、室町初期という「現在」の時間軸に同列に存在し得ると認めることが考えられるのである。このように、卒都婆をめぐる詞章の差異が、（知章）一曲の舞台上の時間、即ち作中時間を大きく左右している。

（知章）謡本諸本において、近世に至るまで、明暦本以下のように、卒都婆をめぐる三年忌云々の詞章の差異が見られないことは頷ける。仮に室町期の（知章）の写本に、明暦本のような詞章を持つた謡本が存在したとすると、（知章）は、「過去劇」から「現在劇」への改変がなされたということになり、卒都婆をめぐる作中時間の改変は、作品成立の背景の問題に繋がりがかねない。卒都婆をめぐる詞章の差異は、源平合戦を扱った修羅能の時間性を意識した室町人と、些か時代を隔てて、そうした時間性には無自覚であった近世人との違いを意味するものではなからうか。

### 三 久次本（知章）と他の修羅能の場面設定

（知章）における卒都婆の扱われようが作中時間の設定に関与するものであることを述べたが、他の修羅能と比較してみても、（知章）におけるこの卒都婆の扱いは様々な点で特異なものである。

（笠卒都婆）では、「次第」により京より南都へ向かうワキ僧が登場する。<sup>(8)</sup> 一段「次第」ワキ春を心の知るべにて、春を心の知るべにて、憂から

ぬ旅に出でうよ。

「名ノリ」ワキかやうに候ふ者は諸國一見の者にて候、われこの程は都に上り洛陽の寺社に参りて候、またこれより南都七堂に参らばやと存じ候

この「次第」は（知章）の詞章と同文であるのだが、ワキは、季節を謡った後、自分が何者であるかを語る。（笠卒都婆）では、この後に「上ゲ哥」が続き、ワキ僧が奈良坂に至る。そして、続く2段の「次第」で平衡の幽霊の化身である前シテ老人が現れる。舞台上は桜が盛りのある春の日であるが、舞台上の時間に関して、それ以上には示されない。先にこの曲を「現在劇」としたゆえんである。（八島）にしても同様の小段構成をもつて始まり、作中時間は、ある春の夜である。

また、「次第」のない（通盛）は、ワキの「名ノリ」で始まる。

一段「名ノリ」ワキこれは阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候、さてこの浦は平家の一門あるひは討たれ、または海にも沈み給ひたる所にて候、あまりにおん痛はしう候ふほどに、毎夜この磯へに出でておん経を読み奉り候、只今も出でて弔ひ申さばやと思ひ候

（通盛）は、世阿弥の手の加わっている修羅能であるが、ワキの夏安居の僧は、自分が何某だとまず語る。このワキ僧は最初から鳴門に居り、作中場所の移動はないが、この所が源平合戦の旧跡であることを語ることは、久次本（知章）2段のワキの語り「げにやこの一の谷は、近頃平家の一門の果て給ひたる所なり」と共通する。但し、（通盛）のワキは、作中場所が古戦場であると語るだけで、平氏の一門が討たれたのが作中時間の現在からどれほど昔であるのかなど、作中時間を特定する詞章はこの後もない。従つて、久次本のように「近頃平家の一門の果て」ところとは語られない。やはり「現在劇」なのである。

一方、先に「過去劇」として掲げた修羅能はこれらとは異なる。例えば〈忠度〉は、次のように始まる。

一段「次第」ワキ・ワキ連花をも愛しと捨つる身の、花をも愛しと捨つる身の、月にも雲は厭はじ。

「名ノリ」ワキこれは俊成のみ内にありし者にて候、さても俊成亡くならせ給ひて後、かやうの姿となりて候、また西國を見ず候ふほどに、西國行脚と志して候

〈忠度〉のワキは、「俊成のみ内にありし者」という、僧形ではあつても、ある特定の性格が付与されている。作中時間という点でいうと、それは俊成在世よりもない時代のことであるという具体的な時間の設定に繋がっている。〈忠度〉では、この後、後場の7段で後シテの「(クドキ)」に「されどもそれを撰じ給ひし、俊成さへ空しくなり給へば、おん身はみ内にありし人なれば、今の定家君に申し、然るべくは作者を付けて賜ひ給へ」と、夢物語り申すに……とあることにより、作中時間の現在には俊成はもう世に居らず、今は子の定家の時代であるのだと、さらに作中時間は特定されることになるが、この1段の「名ノリ」により、室町期の観客は、これから展開される舞台上の時間は、自分達とは遠く時代を隔てた昔であると、「過去劇」として〈忠度〉を観ることになる。

〈敦盛〉においても、ワキの「名ノリ」によって、一曲の「過去劇」としての性格は定められている。

一段「次第」ワキ夢の世なれば驚きて、夢の世なれば驚きて、捨つるや現なるらん。

「名ノリ」ワキこれは武蔵の國の住人熊谷の次郎直実出家し、蓮生と申す法師にて候、さても敦盛を手を掛け申ししこと、あまりにおん痛はしく候ふほどに、かやうの身となりて候、またこれより一の

谷に下り、敦盛のご菩提を弔はばやと思ひ候

室町期の観客は、このワキの「名ノリ」によって、舞台上の時間を自分の時間から遡らせて、「過去劇」として受け止める姿勢を自然と整えるのである。

初段に「次第」のない曲もあるが、本稿で「過去劇」として掲げた修羅能においては、その「過去劇」たる性格は、ワキ登場の「名ノリ」において、曲の冒頭から示されているのである。「過去劇」として展開されるのは、ワキが生前のシテと縁のある人物に設定されているためである。ワキの人物設定が、作中時間、つまり観客が見た舞台上の時間の規定にそのまま結びついている。この件に関して、従来の研究では、ワキの人物とシテとの人間関係にばかり目が向けられた傾向がある。例えば、先の〈忠度〉では、後シテ平忠度の幽霊は、生前藤原俊成に自歌を託した縁により、俊成の旧臣であるワキ僧の前に現れるのであるから、作中人物であるワキに、生前のシテとの特定の縁を持たせることが、シテの妄執の種とも絡み、〈忠度〉一曲の構想にまで関係してくる。確かに、ワキの素性は、曲の主題に関わる一つの重要な要素である。だが、その曲が「現在劇」であるのか「過去劇」であるのか、この違いは室町期の観客の目からすれば、大きな問題である。ワキの性格が、作中時間を規定する役割を担うことがあることに注意したい。

しかし、久次本（知章）の作中時間は、以上のような修羅能の作中時間の規定方法には、全く当てはまらないのである。前章で見たように、久次本のワキ西國の沙門は、〈笠卒都婆〉等と同様に、「次第」の謡で現れ、自らの素性を名乗り、そして須磨へと上ってくる。この初段の小段構成と詞章の文句は、いま見てきた「現在劇」としての性格を有する修羅能と同様である。だが、久次本（知章）の作中時間は、ワキ登場の初段では定まら

ないのである。もう一度、久次本2段を考えてみたい。

ワキは、作中場所の須磨の浦に在るといふ卒都婆について語り出す。「新しい卒都婆を立て置きたり」「亡き人の第三年のしるしと見えて」「年号日付の誌の下に」「この一の谷は、近頃平家の一門の果て給ひたる所なり」(\*傍点稿考)というように、他の(知章)諸本の詞章と比較しても、久次本2段には、作中時間に関わる詞章が特に多い。ワキの語りに至って、久次本の作中時間は、一の谷合戦より間もなくと規定される。室町期の観客は、舞台上の時間が自分達とは遠く時代を隔てており、この曲は「過去劇」として観るべきものと気付かされる。この構成は、先に見たような修羅能の作中時間の設定に馴染んでいた室町期の観客には、特異なものと感じられたであろう。しかも、その「過去劇」たる性格は、ワキの人物の性格によつてではなく、須磨の浦の卒都婆に依つていのである。伝存する修羅能の諸曲を見ても、このような形で作中時間を設定する作品はない。久次本(知章)の特異性が頷かれよう。

久次本(知章)の「卒都婆」の特異性はこれに止まらない。

世阿弥作とされる修羅能を中心に、作中に、構成の面からも主題の面からも一曲を繋ぐ「統一イメジ」の用いられている曲が多い。例えば、(忠度)では、「またこの須磨の山かげにひと木の桜の候、これはある人の亡き跡のしるしの木なり」(2段「サシ」)、(忠度と申しし人はこの一の谷の合戦に討たれぬ、縁りの人の植ゑ置きたるしるしの木にて候ふなり」(4段「問答」)というように、(知章)と非常に似た場面設定で、「縁りの人」が植ゑ置いたという「しるし」の若木の「桜」が示されている。この「桜」は一曲を通して絶えず振り返られる景物であり、シテ平忠度のこの世に留めた執着の象徴であり、正に「統一イメジ」と言えるものである。また、「夕べの花の蔭に寝て、夢の告げを待ち給へ、都へ言傳て

申さんとて、花の蔭に宿り木の、行くかた知らずなりにけり、行くかた知らずなりにけり」(4段「ロンギ」)、「おん身この花の、蔭に立ち寄り給ひしを、かく物語り申さんとて、日を暮らし留めしなり、今は疑ひよもあらじ、花は根に帰るなり、わが跡弔ひて賜ひ給へ、木蔭を旅の宿とせば、花こそ主なりけれ」(9段「哥」)というように、この「桜」は、シテの消え行く、また帰り行く対象でもある。

だが、(知章)の「卒都婆」は、この(忠度)の「桜」とは役割が全く異なる。死後の供養に立てられたものであるという点で、シテ知章の幽霊の生前との関わりを持つものではない。「卒都婆」は、(知章)における「統一イメジ」ではない。作中場面における状況は似ているものの、その有する意味ははかかなり異なる。

(頼政)における平等院の「扇の芝」、(笠卒都婆)における「笠卒都婆」と側の「桜」など、場面の設定においては似た点がある景物とも、(知章)における「卒都婆」は異なっている。(知章)の「卒都婆」は自然の景物ではなく、何よりも作中時間を規定する役割を担っているため、先の久次本2段の詞章に見るように、具体的に、鮮明に示されているのである。

以上、久次本(知章)における「卒都婆」の扱いの特異性を指摘した。この「卒都婆」は、先に見たように、久次本が最も詳しく描いており、後の(知章)諸本では、その語り方に多くの異文が見られる。修羅能諸曲と比較して見た場合の久次本における「卒都婆」の特異性が、後に(知章)の詞章の改変を誘発したと考えられるのである。

#### 四 久次本における「波」

(知章)の「統一イメジ」は何であろうか。久次本5段、前シテ里人の中入りにおける独自異文は、(知章)における「統一イメジ」を示

唆する。

5段「ロンギ(\*部分)」地謡帰る方を見れば須磨の里にも野山にも行か  
で汀のかたをなみ芦辺を指して行くなみの浮きぬ沈むと見えし  
まゝに後ろかげも失せにけりやく

前シテ里人は、須磨の海の方に向かつて消える。前シテが「水に消え行  
く」という趣向は珍しい。そして、後場に入つて後シテ平知章の幽霊は、  
「うかぶべき波爰元やすまのうら」(喜勝本8段「一セイ」と、須磨  
の波間に浮かび上がる(\*久次本は「ウカム□□□□モトヤスマノウラ」と  
当該箇所欠損)。二重傍線部には山部赤人の歌「和歌の浦にしほ満ちくれ  
ばかたをなみあしへをさして田鶴鳴き渡る」(『萬葉集』九二四)を踏まえ  
ているが、喜勝本以下の(知章)諸本は皆、「あしへをさして行田鶴の  
うきぬしつむと見えしまゝに」(喜勝本)と、典拠に沿つた文句となつてい  
る。久次本のみが「行くなみの」と、「波」とするのである。

久次本のこの傾向は先に掲げた一段の詞章にもあらわれている。「旅衣  
八重の塩路をはるくとなを末ありと行く波の雲をもわくるをきつなみ」  
(一段「上ゲ哥」、二重傍線部は他本では「奥つ舟」と、ワキ西国の沙門  
が須磨に上つてくる初段から、久次本は「波」のイメージを重視している。  
7段のワキの待受の「上ゲ哥」「ゆうなみちどりともねしてく」ところも  
すまのうらづたひ<sup>づたひ</sup>、8段後シテ登場の「ノリ地」「かのきしのうみざわ  
にうかみいでたるありがたさよ」等、久次本には随所に「波」の文句と、  
「波」のイメージを踏まえた詞章が見られる。後に詳説するが、知盛をか  
ばつて討たれ、父と別れた須磨の波際への知章の思いを汲み取つて、謡曲  
作者は(知章)に「波」のイメージを取り入れ、前シテ里人の消え行く対  
象を須磨の波間としていと思われる。久次本(知章)における統一イメ  
イジは「波」なのである。<sup>(10)</sup>

先に(忠度)の「桜」の例に見たように、「統一イメージ」である所の  
景物が前シテが消え行く対象となつていふという点は、他の修羅能で言え  
ば(頼政)の「扇の芝」や(笠卒都婆)の「笠卒都婆の桜の陰」等に見ら  
れる。(知章)の「波」にもこれと同様のことが言えるわけである。但し、  
これらの「統一イメージ」が、多く作中場面におけるシテとワキという作  
中人物の交流の機縁となつていふことを考えると、(知章)の「波」は特  
異である。(知章)におけるシテとワキの交流の機縁となるのは「卒都婆」  
なのである。また、この「卒都婆」は作中人物の交流の機縁とされるだけ  
で、後に曲中で振り返られることはない。この点も、他の修羅能に比して、  
(知章)の特異な点である。

だが、この平知章供養の三年忌の「卒都婆」は、久次本2段にワキ沙  
門が「この浦に上がり、これなる磯辺を見れば」と語つたように、須磨の  
浦の「水際」に立てられたものである。須磨の浦のごく水際に立てら  
れ、波が打ち寄せ、「波」に洗われる「卒都婆」、これが、久次本の場面設  
定である。このことを考えるとき、久次本(知章)においては、シテの供  
養のための「卒都婆」と、シテのこの世への思いを示す「波」とが一体の  
ものとして捉えられていると言える。久次本(知章)における「統一イメ  
イジ」である「波」は、「卒都婆」と一体のものである。

### 五 「卒都婆」と供養

ところで、中世の文学において「卒都婆」にはどのような意味が担わさ  
れるのだろうか、また久次本以下の(知章)が三年忌と限定することには  
意味があるのだろうか。

寛一本『平家物語』巻九「三草勢揃」の、

同二月四日、福原には、故入道相國の忌日とて、佛事形の如くおこ



なはる。…世の世にてあらましかば、いかなる起立塔婆のくはたて、供佛施僧のいとなみもあるべかりしか共、たゞ男女の君達さしつどひて、なくより外の事ぞなき。」

に平清盛の忌日に「塔婆」をたてる供養が見られる。平氏は福原に落ちており、清盛の忌日に満足な供養も営めない状況であるが、「いかなる起立塔婆のくはたて、供佛施僧のいとなみもあるべかりしか」とある。この「起立塔婆」というのは、あるいはある程度規模の大きい仏塔のようなものを指しているのかも知れない。

金刀比羅本『平治物語』下「頼朝遠流に宥めらるる事付けたり呉越戦ひの事」には、頼朝の言葉として供養における卒都婆が見える。

中にも正月三日頭殿うたれさせ給ひぬ。けふは二月七日なれば、五七日になるぞかし。頼朝世に有ならば、いかなる佛事をもとりおこなふべけれども、かゝる身なれば力なし。されば卒都婆の一本をもきざみ、念佛をもかきつけて、御菩提をもとふらひたてまつり、一業をもうかひ給ふかと思ふにこそ、小刀・檜木をばたづぬれ。手ずさみにあらず、国弘。とて、なみだをながし給へば、国弘あはれに思ひて、宗清に此由いへば、ちいさき卒都婆を百本作りてまいらせれば、念仏をかき給ひ、僧を請じて供養せばや。と宣へば、宗清がしりたる僧をいれたてまつる。…僧あはれに覚えて、卒都婆のめでたきやう、佐殿の御志深くおはしますよし申開き、成等正覚、頓證菩提、往生極楽。と申て、鐘うちならしければ、佐殿なみだせきあへ給はず、宗清以下のものども「みな」涙をぞながしける。

覚一本『平家物語』の例にも「供佛施僧のいとなみ」とあるように、忌日の仏事に僧を招じ、経を記した卒都婆をもって故人を弔う追善供養が行われるという点で、知章の三年忌を弔う要文の記された「卒都婆」があり、

ワキ沙門が「一見卒都婆永離三惡道何況造立者必生安樂国」（久次本3段）と「卒都婆」の供養を述べるといふ久次本の場面設定と共通点がある。

また、金刀比羅本『平治物語』の当該箇所九条家本巻下「頼朝死罪を宥免せらるる事付呉越戦ひの事」には、五七日の供養とは限定されていないが、「藤三、置てまいらせんとて、むかし、六波羅に万功徳院といふ古寺ありけり、其庭の池の小島に置かんとて、さしもはげしき余寒に裸になり、卒土婆を髻に結付て、游渡りて置てけり」とあり、小卒都婆は万功徳院の庭の池の中の小島に置かれる。「童部共にとりちらされず、牛馬にもふまれぬ」ためとはいへ、卒都婆が水際に供えられることは注目される。供養における卒都婆と水との関連は中世の日記史料にも見られる。『宣

胤卿記』永正十四年（一五一七）四月十二日の条には、中院宣胤の母と思われる北堂の十七年忌に当たる供養が行われた記事が見られ、その追善の仏事の作善の目録に、「毎日彫刻之卒都婆二千本、内二百本、又臨時三十四本、今日流河、七ヶ日七本ハ立墓前」と卒都婆を川に流したとある。これも数の多さからして、経木卒都婆のような規模の大きくない卒都婆かと思われるが、卒都婆と水との関連が認められる。現在でも、四天王寺経書堂では水に経木卒都婆を流すことが行われており、朝熊山金剛証寺の奥の院の水卒都婆、高野山玉川の卒都婆の流れ灌頂等もあり、水と関係する卒都婆の仏事が残っている。久次本（知章）の須磨の水際に立てられた卒都婆も、これら中世の追善供養の形態が反映されていると認めてよい。

（知章）において、「亡き人の第三年のしるし」（久次本2段）、「第三年の追善に縁の人の今朝の間に立て置きたるしるし」（3段）と、「第三年」と限定することが、作中時間の規定に重要な役割を果たしていることを先に述べたが、三年忌と限定することには特別な意味があるのだろうか。

謡曲では、番外曲の修羅能（維盛）に、「當年惟盛の才三年にて御座候

ほとに、御跡をとふらひ申さんために是まで罷下候よ」というように、シテ平維盛の三年忌に維盛の遺児六代と滝口入道が那智の浦を訪れることが作られているが、中世の軍記文学には、三年忌に関する記事が多く見られる。例えば『太平記』には、「御國忌ノ日ゴトニ、種々ノ作善積功累徳セラル。殊更ニ第三廻ニ當リケル時ハ、継体ノ天子今上皇帝、御手自一字三禮ノ紺紙金泥ノ法華經ヲアンバサレテ、五日八講十種供養アリ」（卷第三十九「法皇御葬禮事」）とあり、故光厳院三年忌には特別の法華經写経が行われたとある。また、『曾我物語』卷第十一「貧女が一燈の事」にも、大磯の虎が、曾我兄弟の母に、「この人々の御ために、毎日法花經六部あて六人して、第三年まで六部の心ざし候」と、兄弟の三年忌まで写経の作善を尽くすことを述べる。大石寺本『曾我物語』卷第十では、「三年忌の孝養は、耳目を驚かすほどの仏事なり」と、兄弟の三年忌の仏事が盛大に行われ、兄弟の母や曾我太郎も出家するなど、三年忌は亡き曾我兄弟の追善供養の節目としての仏事とされている。『曾我物語』には他にも、「七日くゝのほか、百ヶ日、一周忌、第三年にいたるまで、諸善の忠節をつくす」（卷第一「おなじく伊東が死する事」とあるなど、三年忌を追善供養のひとつの節目と見ている例がある。

何ゆえ三年忌が追善供養の節目となるのか。このことについて、一つには三年忌が遠忌という特別な年忌供養とされていたことが考えられる。辞典類によると、遠忌は現在では五十年後、五十年毎の追善の法会を言うが、古くは十三回忌以上を指すことが多く、三回忌を遠忌とするのは、さらに古い例であるという。そう言った意味で、三年忌を追善供養の一つの区切りとしたり、仏事を盛大に行うことがなされているのかも知れない。例えば、『源平盛衰記』卷第三十九「重衡酒宴附千寿・伊王の事」には、源頼朝は、故三位中将平重衡の菩提を弔っていた千手・伊王の二人が落飾する

ことを許さなかったのであるが、「中将第三年の遠忌に当りけるには、強ひて暇を申しつつ、千手二十三、伊王二十二、緑の髪を落し、墨の衣に裁ち替へて、一所に庵室を結び九品に往生を祈りけり」と、「第三年」に至って二人の出家を許し、二人は重衡の菩提を祈るとする。二人の出家が、何ゆえ許可されたか、ひとつには三年忌が「遠忌」という特別な年忌供養として位置づけられていたことが関わっているように。

但し、管見の及ぶところでは、中世の日記史料には、十三回忌を遠忌とする例が少なくない。『百練抄』康元元年（一二五六）八月二十日の条「前太政大臣〇藤原実氏天王寺安井辺建立一堂、被遂供養、今年相當故入道太政大臣〇公経十三年遠忌故也」をはじめ、『薩戒記』永享五年（一四三三）四月二十五日の条、『康富記』文安元年（一四四四）十月二十三日の条等である。また、軍記文学においても、『太平記』等でも、「年積テ正行巳二二十五、今年ハ殊更父ガ十三年ノ遠忌ニ当リシカバ、供仏施僧ノ作善如所存ノ致シテ」（卷第二十五「藤井寺合戦ノ事」と、楠木正行は父正成の十三回忌を遠忌と見て追善供養を行い、意を決して出陣する。

仏教儀礼面の検討が本稿では不十分であり、久次本（知章）以下の「卒都婆」が特別な年忌供養と位置づけられていると即断はできないが、中世において、三年忌を追善供養の節目としていることは間違いない。

#### 六 久次本（知章）と本説『平家物語』

久次本（知章）が応永期の能本であることから、『平家物語』研究者を中心に、室町初期の『平家物語』本文の流伝との関係を探求するためもあって、久次本が本説とした『平家物語』本文の検討が早くからなされてきた。荒木良雄氏は、久次本の詞章は増補本系『平家物語』諸本ではなく語り本系の八坂系の本文に近いと指摘され、山下宏明氏は「その出典を八坂

流とか一方流とか、いずれの一方にも割り切れない所に、当時の平曲界の動きを物語るものがあるとも言えるのである」とされながらも、八坂系『平家物語』諸本の中では一類本の中院本の本文が久次本の詞章に近いと指摘された。山下氏のご指摘の通り、現存『平家物語』諸本で言えば、中院本が久次本に最も近い本文を有していると言え、詞章の細部についてまで検討すると、読み本系(増補本系)『平家物語』諸本本文も無関係ではなさそうである。以下、山下氏のご指摘に従い、中院本『平家』の本文を掲げて検討する。稿者が本説『平家』との関係を検討するのは、久次本の本説を確定するためではなく、謡曲作者が本説『平家』をどのように受容し(知章)に反映させているかを見極めることにある。<sup>(23)</sup>

平知章討ち死をめぐる『平家物語』の一連の章段は、語り本系諸本においても、読み本系諸本においても、知章と監物太郎頼方が主知盛をかばい一の谷で討ち死した件、知盛を助けた愛馬井上黒の件、知盛が知章と頼方を見捨てて落ち延びたことを述べた件、これらの要素をもとに構成されている。(知章)は、この一連の『平家』知章譚を三つの小話として取り上げ、『平家物語』本文とは順を違え、前場4段に井上黒の話、後場10段に知盛の述懐を、続く11段に知章の討ち死を配置している。

井上黒をめぐる4段は、次のような「問答」から始まる。

4段「問答」ワキさて知章の討ち死にの時、同じく新中納言も一しよにて果て給けるか

シテいや知盛もすでに討たれ給しを、子息武蔵の守駆け塞がつて、親をば助け我が身は討たれぬ。その隙に大臣殿の御船まで参り、その関をば逃れ給て候。あの沖に見えて候釣り船の遠さ程なりしを、追ひ付き助かり給て候

ワキさてあの沖までは小船にこそ召されて候つらん

シテいや馬上にて候し

ワキ沙門の問いかけに對し、シテ里人から知章の父知盛の一の谷落ちの様が語られるのであるが、この「問答」の問いかけは、(知章)誦本諸本間で、以下のように差異が見られる。

〔喜勝〕わき、扱々どもも智章と一所には給ひて候か、

さん候、知盛もうたれ給ふへかりしを、子息武蔵守かけふさがつて、親をハたすけ其身はうたれぬ。其ひまに智盛は甘餘町のおきに見えたるおゝいとのお舟迄、をひつきたすけり給ひて候

〔下間・毛利もほぼ同文、了随「してさん候、知盛も一所にうたれ給ふへかりしを」上杉・六徳・下刊「してさん候、一所には給ふへかりしを」

〔淵田〕ソウ詞、扱々知盛も知章と一所に果たまひて候か

シテ詞さん候、とももりもすでにうたれたまふへかりしを、子息武蔵守懸ふさがつて、親をばたすけ其身はうたれぬ。其隙に知盛大臣殿の御舟まで参り、其せきをばのがれたまひて候。あのつり舟のとをさ程なりしを、追つきたすかりたまひて候

〔妙庵もほぼ同文〕

〔福王〕ワキ詞扱知盛の御最後何とかならせ給ひて候ぞ、

シテさん候、知盛ハあれに見えたる釣り舟のほどなりし遙の沖の御座船に、追付たすかり給て候

〔明暦・天和・元禄・寛政もほぼ同文〕

久次本の「さて知章の討ち死にの時、同じく新中納言も一しよにて果て給けるか」に比して、喜勝本以下の諸本の波線を付した「扱々どももりも智章と一所にはて給ひて候か」という問いかけは、知章ではなく、知盛の話へと展開を急いでいる語り方である。また、福王本以下の諸本には、「扱

知盛の御最後ハ何とかならせ給ひて候ぞ」とあり、ワキ僧の興味は唐突に知盛の話へと向けられる。福王本以下の詞章は、現行観世流の詞章と同じであるが、この詞章について、かつて佐成謙太郎氏は「前段にワキが「さて知盛の御最期は何とかならせ給ひ候ぞ」と、知盛のことばかり聞いてゐるのは、シテが知章であるか知盛であるかを惑はせて面白くない」と評され、前場は知盛を主材としたと見られた。諸本の「問答」に見るように、（知章）には、シテが知章の幽霊でありながら、父知盛の話に展開を急ぐような、構想の揺れを思わせる面がある。

永祿頃の写本である喜勝本以下の下掛り系本は、「とももりも智章と一所に」というように、知章の名さえ持ち出さない間掛りに比べれば、知章を重視しているように見える。だが、先に3段の諸本「問答」に掲げたように、淵田本以下の上掛り系本の前シテが、「げに〜遠国の御事なればしるしめさぬハ御理。武藏守ともあきらと申し、相國の三男新中納言知盛の御子むさしのかみ知章と申人ハ、此一谷にてうたれ給（淵田本）と知章と知盛の親子関係に触れるのに対し、喜勝本以下の下掛り系本のシテは「武藏の守ともあきらハ、此一の谷にてうたれぬ（喜勝本）と、知盛・知章の父子関係に触れる語りが見られない。2段に「ともあきらとハ一ものうちにても誰にてかましますらん（喜勝本）と語るように、ワキ僧は平知章のことを知らないという結構であるから、ここにおいて知盛・知章の関係を知らずもない。下掛り系本にこのような詞章の矛盾があるように、知盛の話に展開を急ぐのは、室町末期の（知章）諸本にも見える傾向なのである。

『平家物語』における知章譚は、「知章最期」という章段名を有する諸本においても、知章よりは、父知盛に焦点があり、知盛の人物像が印象的に描かれている。次に掲げるのは中院本『平家』巻第九「さつまのかみた

ゞのりの歌の事」よりの抜粋である。<sup>(25)</sup>

（略イ）あはのみんぶ重能、あの御馬、只今かたきものになりなんぞ、いころし候はんとして、中ざしとてつがひそとひいてむかひければ、中納言、よし〜何の馬にもならばなれ、たゞいま、我いのちをたすけたらんずる馬を、いかどなさげなくいころすべき、あるべからずとせいせられて、ちからをよばず、はげたる矢をさしはづす、（略ロ）やがてこの馬をば、かはごえの小太郎しげふさとて、九郎御さうしに奉る、あんの御所へまいらせられたりければ、それよりしてぞ、河ごえくるとはめされける、もともあんの御馬なり、しなのゝみのうへより、まいりたりければ、あのおうへぐるとなづけ、あんの御馬屋にたてられたりけるを、八嶋のおほいどのゝ内大臣になりて、御悦申のありし時、あんに御ひきいで物にたまはらせ給たりしを、おとゝの中納言にあづけ申されけり、中納言、あまりにこの馬をひさうして、まい月ついたちごに、たいざんふくんをぞまつられける、さればそのしるしにや、馬の命も、ぬしの命も、たすかりけるこそふしぎなれ

敵に渡つては不利なので射殺そうという阿波民部重能を制し愛馬への愛情を見せる知盛、兄宗盛より預かった井上黒を秘蔵して泰山府君に祀つたという知盛、何れも『平家』における知盛の人物像を読みとる上で重視されていく箇所である。

久次本（知章）は、この『平家』本文を一切取り入れてはいない。（略イ）の部分には、海を渡って知盛を宗盛の船まで届けた井上黒の姿が、（略ロ）の部分には、追い返された井上黒が知盛を慕って嘶いた姿が描かれており、久次本はこの（略イ）（略ロ）部分の『平家』本文を引用するかたちで取り入れ、4段の「語り」の小段の中心として据えている。

そして、謡曲作者は、「越鳥南枝に巢を掛け」以下の「哥」に力点を置くのである。

4段「哥」地謡越鳥南枝に巢を掛け胡馬北風に嘶えしも旧郷を憶ふゆ  
 系なりとか、胡馬は北風を慕ひ此馬は西に行く船の纜に繋がれても  
 行かばやと思気色なり

ここには、『玉台新詠』巻一雑詩の第三首の七・八句「胡馬嘶北風 越鳥巢南枝」が引かれている（『文選』古詩十九首では「胡馬依北風」）。『平治物語』の古態本系と言われる九条家本等をはじめ、中世の諸作品にも見られる詩句である。動物の身に比えて、人間の故郷を想う気持ちを象徴する詩句である（『知章』のように『玉台新詠』の詩句の上下が入れ替わっているのは金刀本系『平治物語』の本文であり、九条家本は句の入れ替わりはない）。この詩句を謡曲作者は、知盛ではなく、馬の井上黒の明知盛への想いとして描いている。『平家物語』が知盛に注目するのに対し、謡曲作者の目は、井上黒に向けられているのである。部分にしる、『平家物語』本文をほぼそのまま引用してはいるが、謡曲作者は知盛の人物造型に注目したのではない。『平家物語』本文を選択しつつ引用し、引用の意図は、本説とは違う。このことが「越鳥南枝に巢を掛け」以下の詞章の、謡曲作者の創作にあらわれている。本説『平家物語』をそのまま引用し、すぐ後方に謡曲作者独自の詞章を連れ、本説引用の意図を謡うのは、謡曲（知章）における本説処理のひとつの特徴である。

少なくとも久次本（知章）においては、以上のような謡曲作者の本説『平家』引用の意図は明かである。但し、先の喜勝本等のような間い掛けが、早く室町末期に見られることを考えると、久次本の意図がどれだけ受け継がれたかには多少疑問があり、『平家』知章譚と同様、謡曲の側においても、早くから知章の父知盛への注目がなされ、4段「問答」をめぐる詞

章の改変が行われていたのであろう。

後場では、シテ知章の幽霊のこの世への執着が描かれる。

9段「上ゲ哥」地謡龐なるかりの姿や月の顔く写す絵島の島隠れ行  
 く船を惜しとぞ思ふ我が父に別れし船影のあとしら波も懐かしや、  
 これとてもつひにはやうき身を捨て、西海の藻屑となりし浦の波重  
 ねて弔ひて賜ひ給へく

シテ知章の幽霊にとつて、「白波」の立つ須磨の浦こそが、この世でいちばん思いの留まる場所である。この須磨の浦に知章三年忌供養の卒都婆が立てられており、波と共に後シテ知章の幽霊が立ち帰ってくる。父知盛さえもすでに西海の波に沈んだことを思い、知盛の回向をも願っている。本説『平家』においては、知章譚においても『平家』全巻においても、知章は言葉が発することもなく、心情に触れられることもないが、謡曲作者はそこを推し量り、シテ知章の幽霊に謡わせている。

安徳帝以下、海に迷れた平氏についても「波」のイメージを駆使し謡う。  
 10段「クリ」地謡さてもその時の有様語るにつけてうき名のみ立田の  
 山の紅葉葉の紅なびく旗の脚散りくくなる気色にて

「サシ」シテ主上二位殿を始め奉り大臣殿父子

地謡一門皆く船に取り乗り海上に浮かむよそはひたゞ蒼波のう  
 ねに浮き沈む水鳥のごとし

シテその中に親にて候新中納言我知章監物大郎主く三騎にうち  
 なされ御座船を窺ひこの汀にうち出でたりしに

地謡敵手繁くかゝりしあひだまた引つ返し打ち合ふほどに知章監  
 物大郎主くこゝにて討ち死にする

シテその隙に知盛は

地謡二十余町の沖に見えたる大臣殿の御船まで馬を泳かせ追ひ付

きて御船に乗り移り甲斐なき命助かり給ふ

『平家』知章譚を三つに切り出して引用したために、(知章)では、三度シテ知章の幽霊の死に触れることになる。続いて本説『平家』をほぼそのまま引用するかたちで、知盛の父親としての述懐が謡われる。

10段「クセ」地謡知盛その時に大臣殿の御前にて涙を流したはく武藏の守も討たれぬ監物大郎頼方(つぐな)もあの汀にて討たるを見捨て、これまで参る事面目もなき次第なり、いかなる子は親のたへ命を惜しまぬ心ぞやいかなる親なれば子の討たるを見捨てけん命は惜しき物なりとさめくと泣き給へばよその袖も濡れにけり大臣殿ものたまはく武藏の守はもとよりも心も剛にして良き大将と見しぞとて御子右衛門の守の方を見遣りて御涙を流し給へば船の中に連なれる人ぐも鎧の袖を濡らしけり  
シテ武藏の守知章は

地謡少年二八の春なれば右衛門の守も同年にてともに若葉の磯馴れ松千代を重ねて栄ゆくや累葉枝を連ねつゝ一門門を並べしにことしのけうのいかなれば所も須磨の山桜若きは散りぬ埋もれ木のうき名漂ふ船人となり行く果てぞ悲しき

(知章)にも「むさしのかみどのは、心もがうに、よき大将にておはしつる物を」(中院本)という、宗盛が知章の武勇を称えた『平家物語』本文が引用されている。『平家物語』では、知章よりも、生死を賭した戦場において我が子を見捨てて逃げ延びてしまった「いかなる親なれば、かたきにくむ子を見捨て、かへし候はざりつる事、身ながらも、命はおしかりけりと存候、人の上ならばいかばかりかもどかしく候なん」(中院本)という父平知盛の冷静に己の行動を見つめるさまと嘆きの方が中心に描かれており、ここも『平家』における知盛像の把握において、特に注目されて

いる場面である。

だがここでも、『平家』本文を取り入れた謡曲作者の目は、知盛に向けられたものではない。先の4段「越鳥南枝に巢を掛け」以下と同様、本説『平家』を「クセ」の上ケ端「武藏の守知章は」まで引用しつつも、その後、謡曲作者の詞章の創作がなされている。『平家』諸本においては語り手の平知章哀悼の語句は見られないのであるが、(知章)においては、波に漂うイメジを交えてその若さが悼まれる。謡曲作者の目は、知盛ではなく、井上黒や知章など、いわば主への忠節を尽くす側に向けられているのである。

この「クセ」には、傍線を付した「ことしのけふのいかなれば」の詞章に諸本で異文が見られる。室町末期から安土・桃山期にかけての上掛り系本である淵田本と妙庵本では「むかしのけふのいかなれば」(淵田本)となっているのである。この相違は時間の把握の違いを意味するのであろうか。このことばは、歌によく詠まれるものである。<sup>(26)</sup>

覚快法親王かくれ侍て、周忌のはてに墓所にまかりて、  
よみ侍りける  
前大僧正慈円

八四一 そこはかと思つゞけて来てみれば今年のけふも袖はぬれけり

(『新古今集』巻第八 哀傷歌・『慈鎮和尚自歌合』八七)  
前右近中将資盛みまかりて後、忌日にしのびて仏事など  
いとなみても、わがなからむ世にたれかはこれ程もとぞ  
らはむなどかなしくおもひつゞけて読み侍りける

建礼門院右京大夫  
二三五三 いかにせんわが後の世はさても猶むかしのけふをとよ人もがな

(『玉葉集』巻十七 雑歌四・『建礼門院右京大夫集』二六九)  
慈円の歌は覚快法親王の一周忌法要の終わりの日に詠まれたもので、去

年と同様に今年の命日にも悲しみに袖が濡れている、と歌っている。『後撰集』にも紀時文の歌に、亡き妻の一周忌の法要に「去年は今年の今日にぞありける」（巻第十哀傷 五八六）と見える。「ことしのけふ」ということばは、忌日における亡き者を悼む歌に見えるのである。一方、「むかしのけふ」を詠んだ建礼門院右京大夫の歌も、自身の亡き後を気に掛けつつも、忌日に故人平資盛の亡き日 pensando 詠まれている。また、『玉葉集』にも、大蔵卿行宗が父の遠忌の供養に時鳥に己の身をよそえて「むかしのけふをこひつつぞなく」（雑歌四 二四〇八）と詠んでいる例が見られる。つまり、「ことしのけふ」も「むかしのけふ」も、年忌供養などにおいて故人の亡くなった日を思い起こし、追悼して詠まれることばなのである。

淵田本や妙庵本の「むかしのけふ」の詞章は、こういった歌語の例を背景のうえのもので、誤写ではない。シテ知章の幽霊が己が討たれた時点で立ち戻って語っているというわけでもなく、歌語の用例を背景に、第三者的な立場で平知章哀惜の思いが綴られているのである。久次本（知章）の、三年忌供養の場面という設定が、一曲の主題や構想と関わって、謡曲作者の「クセ」の詞章の創作に反映されていると言つてよい。

久次本（知章）結末部で、ワキ沙門の「同じくは御最期を懺悔に語り給へや」という勧めに応じて、シテ知章の幽霊は「懺悔」として自らの最期のいくさ語りをする。ここでも、児玉党の攻め寄せるさまが「波」に喩えられている。

11段「ロンギ」地謡げに痛はしき有様の同じくは御最期を懺悔に語り

給へや

シテげにや最期の有様を懺悔懺悔にあらはし修羅道の苦患免

れん

地謡げに修羅道の苦しみのその一念も最期より

シテ来たりしまゝの敵にて

地謡すはや寄せ来る

シテ浦の波

〔中ノリ地〕地謡團扇の旗は児玉党かものくしと言ふまゝに監

物大郎（つご）が放つ矢に敵の旗差し（つご）の首の骨髄深に射させてまん逆様にどうと落つれば

シテ主人と思しき武者

地謡く新中納言を目に掛けて駆け寄せて討つところを親を

討たせじと知章駆け塞がつてむんずと組んでどうと落ち取つて押さへて首掻き切つて起き上がるるところをまた敵の郎等落ち合

ひて知章が首を取ればつひにこゝにて討たれつゝそのまゝ修羅の業に沈むを思はざるに御僧の弔ひはありがたやこれこそまことの法の友よこれぞまことの知章が後の世を照らして賜はせおはしませく

『平家』では、知章の最期のさまをめぐって、「けんもつ太郎返しあはせ、きこゆるゆみの上ずなりければ、まさきにすゝみたる、はたさしが、しやくびのほねいておとしけり」、「けんもつ太郎おちあひてむさしのかみの、御くびとりたつるわらはがくびをもとてげり、よりかたも、右のひさのふしをししたゝかにいさせて、たゞざりければ、みながらかたき三人うちとて我身もうち死してげり」（中院本）と、むしろ乳母子の監物太郎頼方の討ち死の方が詳細に語られている。延慶本や『源平盛衰記』等の読み本系『平家物語』にも頼方の壮絶な最期が描かれている。頼方に比べれば、知章の討ち死は、「しゆ人とおほしきもの、新中納言にかかり奉る所を、御子むさしのかみともあきら、中にへだゞり、ひきくんでどうどおつ、かたきがくびかいて、をきあがらんとし給所に、かたきがわらはおちあひて、

むさしのかみのくびをとる（中院本）というほどにしか語られていないのであるが、謡曲作者は、頼方の最期のさまには全く触れることなく、知章の死のみを取り上げ、この世で闘戦にかかわった罪により「そのまま修羅の業に沈む」とするわけである。

謡曲（知章）は、『平家物語』本文の引用度が高く、本説を無作為に引用していると評されることがある。<sup>(28)</sup>「軍体の能姿、仮令、源平の名将の人体の本説ならば、ことにく平家の物語のまゝに書べし」（『三道』三休作書条々）といったのは世阿弥であった。しかし、謡曲作者は、本説『平家』において僅かにしかその人物像の描かれていない知章に注目し、知章をシテとして造型したのである。その謡曲作者の手腕が確認されねばなるまい。また、『平家』本文を多く引用して詞章を構成することが、必ずしも『平家』の構想をもそのまま受け継ぐことを意味するとは限らない、ということも久次本（知章）が示していることに留意しておきたい。

### 七 結び

須磨の浦の「卒都婆」に打ち寄せる「波」によって、シテ知章の罪を洗い流して供養する。これが久次本（知章）の構想の中心である。久次本の作中場面に存在する「卒都婆」は、「第三年のしるし」という特異な設定がなされているが、この「卒都婆」は、繰り返し用いられる「波」という「統一イメージ」と一体のものであると言える。

結末部の「法の友」ということばは、世阿弥の（教盛）の構想にかかわる重要な意味を担ったこととあり、須磨の浦を描く詞章などは（忠度）等の世阿弥作の曲との関連を思わせる。「波」のイメージを重用している点などからも、久次本（知章）は、世阿弥の周辺と関連のある作品と考えるとよいだろう。しかし、世阿弥周辺の修羅能の作品と比較すると、本稿で

明らかにしたとおり、久次本（知章）は種々の面で特異である。一曲の構想は、多くの修羅能に見られるようなシテのこの世への執着を描くことよりは、シテの供養を重んじる方向にあり、この意図が前面に押し出されている。（知章）諸本間に見られる本文変化の背景には、久次本の特異性が影響しているのかも知れない。また、こういった特異性が、近世に至って、靡曲とはならずとも、（知章）が外組の曲と扱われ、現代に至るまであまり高い評価が得られていない所以なのかも知れない。

### 【注】

1 「久次」署名本（知章）は、川瀬一馬氏によって昭和十六年に発見された上掛り系の能本である。奈良生駒宝山寺蔵で、同寺蔵の世阿弥能本と成立年代・伝来を同じくし、世阿弥筆とする説もあるが、現在は世阿弥自筆説は否定される方向にある。第一紙裏の左端に本文と同筆で「トモアキラノ能 金春大夫殿」と墨書があり、奥書に「應永卅四年二月十五日 久次（花押）ノコンハル大夫殿」と記す。「久次」の二字は難読であるが、以下、先覚に従う。以下同本を久次本と称する。同本の書誌等については、川瀬一馬氏「世阿弥真蹟 能本七番附目録書状」昭和十九年、わんや書店刊・香西精氏「久次本『知章』」（『世子参究』昭和五十四年、繪書店刊所収）・望月郁子氏「トモアキラノ能」『非世阿弥自筆説補考』『日本文学誌要』第五五号、一九九七年三月・味方健氏「作品研究『知章』」『観世』平成十年二月、等を参照ありたい。

2 同本は片仮名書き（一部漢字交じり）であるが、読み易さの便宜から平仮名に直し濁点を付し、適宜漢字を宛てた。同本は料紙下部に欠損による判読不明箇所が多くあるが、諸本をもって本文が推定できる箇所は補つてある（以下同じ）。なお、（知章）の段・小段分け等については、表章氏監修・月曜会編『世阿弥自筆能本集』一九九七年、岩波書店刊に従う。

3 本稿で比較の対象とした諸本は、以下の通りである（～）内は『補訂版 国書総目録』『能の本』所掲の記号。  
下掛り系 ○喜勝：金春喜勝節付冊子本（19）（法政大学能楽研究所蔵・写本）  
○下間：下間少進平次鳥飼道断節付本（37）（法政大学能楽研究所蔵・写本）  
○毛利：毛利家旧蔵鳥飼道断節付本（42）（岡山文庫蔵・写本）○了随：慶安承応了随本（随三百番本）（51）（岡山文庫蔵・写本）○上杉：上杉家旧蔵下掛り番外冊本（番外4）（法政大学能楽研究所蔵・写本）○六徳：下掛り横本番外冊本（六徳本系金春流謡本）（番外3）（法政大学能楽研究所蔵）



所蔵・写本) ○下刊：江戸初期刊外組小型本(キ)(鴻山文庫蔵・版本)  
 上掛り系 ○久次：金春大夫宛応永三十四年奥書能本(3)(宝山寺蔵・写本)  
 ○淵田：淵田虎頼等節付本(26)(松井文庫蔵・写本) ○妙庵：妙庵玄又手  
 沢五番綴本(51)(松井文庫蔵・写本) ○福王：福王系番外譜本(番外2)(法  
 政大学能楽研究所蔵・写本) ○明曆：明曆三年初夏外組本(ハ)(鴻山文庫  
 蔵・版本) ○天和：天和三年初冬山本長兵衛外組本(フ)(法政大学能楽研  
 究所蔵・版本) ○元禄：元禄三年六月山本長兵衛外組二百番本(ホ)(白鹿記  
 念酒造博物館蔵・大阪女子大学図書館蔵・版本) ○寛政：寛政十一年弥生山  
 本長兵衛外組本(ホ)(武生市資料館蔵・版本)  
 以下、各本の本文については、適宜校訂して示すこととする。  
 『能 研究と発見』一九三〇年、岩波書店刊。  
 『能の幽玄と花』一九四三年、岩波書店刊。  
 修羅能における舞台上の時間(作中時間)と観客の時間とを測るには、従来の謡  
 曲の分類法では捉えきれないと考え、観客の居る時間から考えて、本稿では、  
 仮に「過去劇」「現在劇」という分類を試みた。稿者もまだ整理のつかない問題  
 もあるが、修羅能全般の時間の問題として、別稿を用意する所存である。  
 米倉利明氏「能の素材と構想―「実盛」の能を中心に―」『文学』31、一九六三  
 年一月、等。  
 以下、(知章)以外の謡曲の詞章は、日本古典文学大系『謡曲集上・下』岩波  
 書店刊による。

「統一イメージ」という術語の定義の曖昧さ、作者判定の有効性の問題などは、  
 竹内晶子氏「世阿弥のドラマトウロジー―統一イメージから「等価の原理」  
 へ」(『ZENKŪ』中世の芸術と文化)01、二〇〇二年一月)等に説かれるように、  
 昨今疑問視されることがある。稿者も謡曲研究におけるこの術語の有効性につ  
 いて疑問がないわけではなく、必ずしも「統一イメージ」の有無が(知章)の  
 作者の判定に有効であるとは思わないが、レベルの違いこそあれ、世阿弥ツル  
 ープの曲を中心に、イメージの統一が窺われることは確かであり、いまだこれ  
 に変わる有効な見解が示されているとは思わない。  
 堂本正樹氏は「全体に一貫したイメージは殆だと思いません。原作ではワキが船  
 に乗って来るわけ。前シテの初回は一見馬の話ですが、実は「胡馬は北風を轟  
 ひ、この馬は西にゆく船の、纜に繋がれても行くかばやと思ふ心なる」わけだ  
 が父と一緒に船に乗りたかつたという伏線になっているわけだ」  
 (関根祥六氏・関根祥人氏・堂本正樹氏「座談会『知章』をめぐって」『観世』  
 平成十年三月)と発言されている。本稿に述べたことから考えて、この発言には  
 従えない。

日本古典文学大系『平家物語 下』岩波書店刊による。  
 日本古典文学大系『保元物語 平治物語』岩波書店刊による。

新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』岩波書店刊による。  
 参考、水藤眞氏「石塔の在り方―作善・積善とは何か―」(『中世の葬送・墓制  
 』石塔を造立すること)『平成三年、吉川弘文館刊、所収)。  
 『版本番外謡曲集一』三百番本(平成二年、臨川書店刊所収(催盛)による。底  
 本は貞享三年林和泉掾刊三百番本)。  
 日本古典文学大系『太平記三』岩波書店刊による。底本は慶長八年刊古活字本。  
 日本古典文学大系『曾我物語』岩波書店刊による。底本は十行古活字本。  
 新編日本古典文学全集『曾我物語』小学館刊による。  
 『仏教文化事典』佼成出版刊・『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂刊、等。  
 水原一氏「新定 源平盛衰記 第五卷」新人物往來社刊による。  
 「世阿彌の典拠とした平家物語」『甲南大学文学会論集』2、一九五五年。  
 「室町時代の平家物語―謡曲詞章との関係から―」(『平家物語研究序説』明治  
 書院、昭和四十七年、所収)。  
 稿者の修羅能の本説としての『平家物語』に対する考えは、「謡曲(忠度)論―  
 「文武二道」の武人シテ忠度の造型―」『筑波大学平家部会論集』第八集、平成  
 十二年十二月において触れた。  
 (知章)「概評」『謡曲大観 第四卷』昭和六年、明治書院刊。  
 高橋貞一氏編『未刊国文資料 平家物語(中院忠と研究三)』昭和三十七年による。  
 以下、和歌は『新編 国歌大観』角川書店刊による。  
 但し、『源平盛衰記』のみが、知章討ち死のさまの後に、「知章は、忽ち勇兵の  
 首を獲て、専ら壮士の名を顕はし、遂に父の死を救ひ、永く己が命を亡ぼす」(巻  
 第三十八「知盛戦場を逃れ船に乗る事」というように、語り手の知章の哀悼の  
 本文を有していることは注目される。  
 日下力氏「軍記物語と能(二)」「俊寛」「知章」「国立能楽堂」93、等。

附記 本稿は平成十三年度中世文学会春季大会(於群馬県立女子大学)にお  
 ける口頭発表をもとに成稿したものです。席上御教示頂いた先生方に、記  
 して御礼申し上げます。また、本稿を成すに当たって、法政大学能楽研究  
 所に資料の閲覧を賜りました。記して御礼申し上げます。

(いわぎ けんたろう 筑波大学大学院 文芸・言語研究科 学生)

28

27 26 25 24

23

22 21 20 19 18 17 16

15

14 13

13

12

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1